

の指輪を取り出した。毬江の前にパヴェエリングが置かれると、毬江は今左手の薬指につけているペアリングをはずすことなく、そのまま付け足すかのようにパヴェエリングをはめ始めた。

「やっぱり」

「？」

「ペアリングとパヴェエリングを一緒につけると、似合うの」

「あ、ほんとだ……」

小牧も店員さんも予想外のことと隠すことなく驚いた。

薬指の下の方にあるペアリングはシンプルがゆえに、同じ薬指の上にあるパヴェエリングの豪華さを過度にしないよう抑えながらも、存在感をひきたてていた。

逆にパヴェエリングの方は、豪華さを適度に抑えられながらも並べられた無数のダイヤが際立つて輝いていたので、まるで二つの指輪で一つになっているかのように整然と、そしてしっくりしていた。

「同じ指に二つ指輪をつけるのもいいものでしょう？」

「うん、お互いがお互いを邪魔にせず、似合っているね」

「へへっ。ペアリング、本当にこれからもずっとつけていたから。」

だから結婚指輪を買うならペアリングと一緒につけても似合うものにしたかったの」